

チェスは将棋よりも単純か！？

～将棋ファンに贈るエッセイ～

元全日本チャンピオン 塩見 亮



はじめに

昨年国民栄誉賞を受賞された羽生善治九段が、チェスでも国内トップレベルの実力者であることは、ご存じの方も多いでしょう。

また、若手精鋭の青嶋未来五段もチェスが趣味で、やはり昨年12月に香港で行われた大会に参加し、見事優勝。日本人として初めて、海外のオープントーナメントを制する快挙を成し遂げました。

プロ棋士のそんな活躍をきっかけに、「チェスにもちょっと関心を持っている」という将棋ファンも多くいるのではないのでしょうか？



このたび、日本で唯一のFIDE（国際チェス連盟）加盟団体、NCS（ナショナルチェスソサエティーオブジャパン）が発足しました。この機会に、そんな将棋ファンみなさんに贈るメッセージがこの記事です。

チェスへの「ありがちな誤解」を払拭しながら、将棋と似ていて、でも違った面白さもあるチェスの魅力の一端をお伝えできたらと思っています。

チェスのルールはまだあまり知らないという方は、棋譜や図面は読み飛ばしていただいてOKです！（なお、この記事は、2012年に、日本チェス協会の機関誌に寄稿したエッセイをもとにしています。）



日本の「チェスファンあるある」

チェスと将棋は、親戚にあたるゲームです。

ルールもよく似ています。

だから、日本でチェスの話をするときは、将棋との比較で語られることが多くなります。

たとえば、初めて会った人に、「趣味はチェスだ」という話をしたとしましょう。

「チェス？ ああ、馬の形をした駒とか、あれね。将棋みたいなゲームなんでしょ？」

と、ここまではいいのですが、

「でも、チェスって、将棋より単純だからねえ…」

なんて言われたりして、相手にも悪気はないのですが、チェスがゲームとして劣っていると言われたような感じがして、何となくモヤモヤした気分になる。これは、日本のチェスファンの「あるある」です。

そんなとき、「いや、そんなことはない！」と語気を荒らげて反論したりすると、「めんどくさい奴だなあ……」と思われかねないので、私の場合、普段は苦笑してやりすごしたりしています。が、この場ではあえてムキになって、「チェスは単純（で、つまらない）」に対する反論を試みたいと思うのです。

先に断っておきますが、私は決して「チェスは将棋よりもすぐれている」と言いたいわけではありません。

ん。私自身、小学生のころは将棋に夢中で、将来はプロ棋士になりたい、などと思っていたくらいでした。

将棋もチェスも、それぞれに面白いところがあり、どちらも素晴らしいゲームである、というのが私の実感であり、信念です。

だからこそ、なんとなくの先入観で、「チェスは劣ったゲームだ」と思われしまうのは、残念だなあと思うわけです。

さて、「チェスって、将棋より単純だからねえ…」という発言がなされるとき、その理由として挙げられがちなのは、以下の3つがあります。

- ①「チェスって、取った駒が使えないでしょ？」
- ②「チェスって、引き分けが多いでしょ？」
- ③「将棋の羽生さんは、チェスをやっても強いんですよ？」

(注：2012年にこの記事に掲載したときは、実は「理由」がもうひとつありました。くわしくは文末の「補足」参照)

これらはすべて、それ自体は間違っていない。しかし、だからと言って、チェスが単純で劣っているという理由になるのでしょうか？

「いや、そんなことはない！」というのが私の主張です。

「チェスって取った駒が使えないんでしょ？」

まず、①の発言から。

たしかに、取った駒を自分の駒として再使用できる、というルールは将棋独自のもので、将棋をゲー

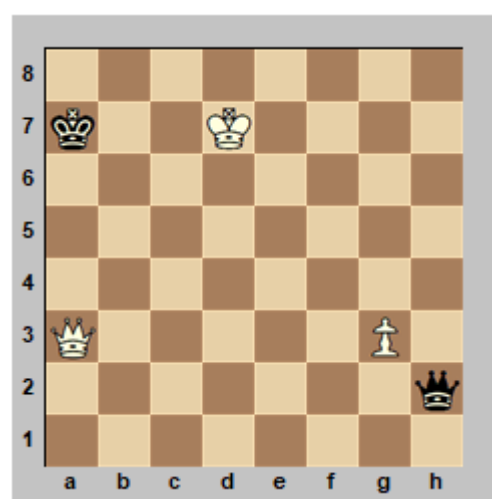
ムとして面白くしている、いわば一番のセールスポイントと言えるでしょう。

また、数学的なことはくわしくわかりませんが、このルールによって、手の分岐の可能性が桁違いに増大していることは間違いないと思われます。

そのような知識のある人は、「チェスは取った駒が使えない」→「駒が減る一方」→「単純でつまらない」という考えになりがちなのかもしれません。

しかし、駒が減って手の可能性が狭くなれば、局面は簡単になるかということ、必ずしもそうではありません。

たとえば以前、イギリスのある大会で、このような局面が現れました。



(第1図) 黒番

黒は、a3にあるクイーンでチェック(王手)をかけられています。キングが逃げる場所は3ヶ所です。

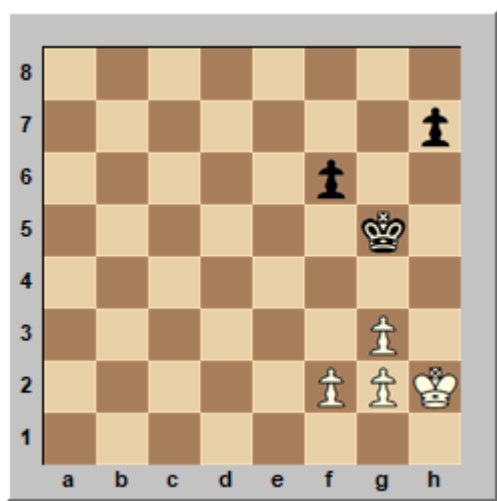
結論としては、b7、b8に逃げると黒の負け。ドロウ(引き分け)に持ち込む唯一の逃げ場所はb6だそうです。その理由は……、

「私には聞かないでくれ(笑)」と、アイルランドのGM(グランドマスター)、Baburinは解説に書いています。これはもちろん、バブーリン氏が怠け

ているのではありません。本当にわからないのです。

コンピュータに計算させればそういう結論が出るけれど、変化が膨大すぎて、人間には理解できない。よって、解説することも不可能、ということなのです。

バブーリン氏はGMですから、将棋でいえばプロ棋士のようなものです。盤上に駒が5つしか残っていないのに、プロにも理解不能な局面があるとは、将棋の感覚からすると不思議ではありませんか？



(第2図) White to move and win

(白先白勝)

第2図は、やはりイギリスのGM Nunn (ナン) によるスタディ (エンドゲームの創作問題) です。

これも正解を書いてしまいますが、白が勝つ唯一の手は **1.Kh1!!** です。1.Kh3 や1.Kg1 はドローになります。

その理由を説明するためには、このエッセイと同じくらいの文字量が軽く必要になるでしょう。こんなふうに、将棋でいえば玉と歩しか残っていないなくても、やはりおそろしく難解な場合があるのです。

「終盤は駒の損得より速度」という将棋の格言がありますが、チェスの終盤では駒が減ってくると

もに、むしろ相手にどうやって手を渡すか、とか、時間がかかってもいいからこの「形」を作るのが大事、とか、序中盤とは違う考え方が必要になってきます。

そういう意味では、「駒が少ないからこそ難しい」とさえ言えるかもしれません。



「チェスって、引き分けが多いんでしょ？」

次に②の発言。これには、どちらかという、チェスが「単純」というよりは「退屈」というニュアンスが込められているように思います。

将棋は、千日手や持将棋というルールはあるものの、原則として「勝つか負ける」かのゲームです。一方チェスは、特にプレイヤーのレベルが高くなればなるほど、引き分けの割合が高まっていきます。GM同士の総当たり戦などでは、10 戦してすべてドローとか、そういうことも珍しくはありません。

だからといって、

「チェスで、引き分けが多いからつまらないよね」

と言うのであれば、逆に、こう言い返すこともできてしまいます。

「チェスには勝ち、負け、引き分けの3通りがあるのに、将棋には、勝ちと負けの2通りしかなくて、単純でつまらないよね！」

と。

いえ、もちろんこれはムキになっているだけで、実際にそう思っているわけではありません。最初に言ったように、将棋は素晴らしいゲームなのです。

結局これは優劣ではなく、それぞれのゲームにはそれぞれの特性がある、ということでしょう。



アメリカでの話だったのでしょうか。サッカーは0対0の引き分けが多くてつまらないから、ゴールの横幅を広げて、点数がいっぱい入るようにしたけど、全然普及しなかった

……というエピソードも聞いたことがあります。

たしかに、あまりに引き分けばかりだと、番勝負が長引いて会場を確保するのに困るとか、別の都合から、勝負をはっきりとつけたいたいという立場の人もいます。

1984年の、世界チャンピオン Karpov (カルポフ) と挑戦者 Kasparov (カスパロフ) のマッチ (先に6勝したほうが勝ちというルール) では、カルポフが5勝3敗40引き分け (!) となったところで中止となりました。今の時代では、このようなエンドレス形式のマッチを運営することはなかなか難しそうです。

ドローが多くなりがちなハイレベルの大会では、サッカーのように勝ちを3点、引き分けを1点と数えて、プレイヤーの勝ちに行くモチベーションを高めたり、見ている人が興ざめするような短手数の場合ドローは禁止する、といった工夫も近年は見られます。

また、World Cup という大会のように、勝ち抜きトーナメント形式として、通常の2ゲームで勝負がつかなければ早指しを2試合、さらにブリッツ (超早指し) を2試合、それでも決着がつかなければサドンデス (白が4分、黒が3分の持ち時間で、

ドローだったら黒の勝ちとする) と、無理やり勝ち負けをつけるようなルールもあります。

しかしそれらはすべて、どちらかというと盤外の事情によるものであって、ドローそのものが悪いと考えているわけではないはずです。

こんなゲームがありました。

□Beliaevsky

■Christiansen

Reggio Emilia 1987



(第3図) 黒番

黒は大きく駒損しており、敗勢と言える局面です。

しかし、あきらめずに引き分けを狙いにいきます。

36...Qxf7!?

最強の駒であるクイーンを、価値の低いビショップと刺し違えようとします。

これに対して37. Qxf7?と取り返してくれれば、37...Rh3+ 38. Kg1 Rg3+……と延々とチェックが続き、「パペチュアル・チェック」のドローになります。

将棋では連続王手の千日手は禁じ手ですが、チェスでは引き分けになるのです。

37.Rd7!

上記の罠を見破った好手。37...Qxe6 とクイーンを取られてしまいそうですが、その場合は38. Rh7!# でぴったりチェックメイト（詰み）となります。

37...Qxf6!?



(第4図)

黒はしつこく、クイーンを取られる位置に動かしてきました。しかし、今度はクイーンを取り返しても、38...Rh3+ 39. Kg1 Rg3+ 40. Kf1! と逃げて、f3のマスにはクイーンが利いているため、先ほどのパペチュアル・チェックはなさそうです。

よって、今度は取って勝ち!と、白は確信したはずですが……。

38.Qxf6?? Rh2+!! 1/2-1/2 (ドロー)

ルックをただ捨てる、この手がありました。以下、39. Kxh2と取るしかありませんが、39...Rg2+ 40. Kh1 Rg1+……ともう一つのルックも強引に捨てる手があります。

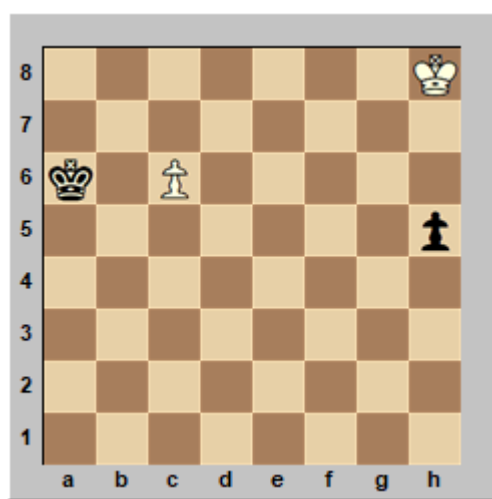
逃げ続けるとパペチュアルになってしまうので、どこかで取るしかありませんが、そうすると……次

に黒が（合法的に）指す手がひとつもありません！チェスならではの引き分け、「スタイルメイト」の出現です。

白（有名なGMです）は、パペチュアル・チェックの筋を気にするあまり、スタイルメイトというもう一つのドローの狙いを見落としてしまったのでした。

戻って38. Qxf6 では、かわりに38. Rh7+! Kxh7とルックを捨ててから39. Qxf6とクイーンを取れば、どちらのドローの狙いも消えていて白の楽勝でした。

必敗の局面で、あきらめずに一筋の引き分けを狙いにいった黒の姿勢は、退屈どころか、非常にエキサイティングだと思いませんか？



(第5図) 白番

白先引き分け

第5図は、中級以上のチェスプレイヤーであれば誰でも知っている（はず）、古典的なスタディです。（1921年、R. Reti作）

白のポーンは、黒のキングに簡単につかまってしまいそうです。対して白のキングは、黒ポーンが前進してh1でクイーンにプロモーション（成り）するのを止められそうにもありません。

しかし、白にはドローに持ち込む方法があるので
す（解答は最後に）。これはコロンブスの卵のよう
なもので、知ってしまえばああそうか、となります
が、最初に答えを発見したときは感動したことを覚
えています。

負けてしまいそうな局面から、なんとかドローに
持ち込む。そこには、優勢な局面を勝ちに持ってい
くのにも劣らない達成感があり、チェスの醍醐味の
ひとつであると思うのです。



「将棋の羽生さんは、チェス をやっても強いんでしょ？」

次に③の発言。

その通り、羽生さんは強いです。

2011年10月のことですが、羽生善治二冠と森内俊
之名人（肩書はいずれも当時。そう、森内さんもチ
ェスが強いんです！）がフランスでGM Vachier-
Lagrave（ヴァシエラグラヴ）と二面指しの親善
試合を行い、羽生さんがドローを取りました。

そして、「羽生善治、仏チェスチャンピオンと引
き分ける！」と報道されたりすると、「羽生さんは
チェスでもチャンピオンレベルなんだな」「チェス
は将棋より単純だから、羽生さんなら片手間でもそ
のくらいは当然だね」などというのが、大方の反応
になってしまうのかもしれませんが。

しかし、冷静に調べてみますと、羽生さんの世界
ランキングは、2019年3月現在で「3295位」です。
報道では（あえて？）触れられませんが、このよう
な数字をきちんと出せば、チェスは単純と思われる
どころか、逆にチェス界の世界的なスケールの大き
さを知ってもらえるはずです。

もちろん私は、羽生さんの実力を否定したいので
はありません。Vachier-Lagrave戦も、引き分けに
持ち込んだというよりは、惜しくも勝ちを逃したと
いう印象の素晴らしい内容でしたし、そもそも大人
になってからチェスを始めて世界3000位あたりにつ
けているというのは、普通ではなかなか考えられな
いことです。

羽生さんがすごいのは、先天的な才能だけではあ
りません。将棋という本業がありながら、GMの実
戦やオープニング（序盤）の定跡を驚くほど深く研
究されていますし、多忙の合間を縫うように、やは
り日本トップの小島慎也君などとの研究会に参加し
たり、ときには海外大会でもプレーをしています。

羽生さんがどれほどチェスに力を注いできたか、
それは近くで見えてきた私たち日本のチェスプレー
ヤーたちが一番よく知っていることです。

なので、先ほどの発言の中にあつた「片手間に…
…」という言葉にも、私はつい反応してしまいま
す。「羽生さんは、片手間にチェスをやっているわ
けではない！」と。



と、少々アツくなってしまいましたが、何だか
んと言っても将棋とチェスは親戚。似ているところの
多いゲームです。

ですから、将棋が好きな人はチェスの楽しさを理
解しやすいでしょうし、将棋が得意な人なら上達す
る可能性も高いはずです。

少しでもチェスに興味を持たれた方は、ぜひ新団
体、NCSの会員になっていただき、大会に参加して
みてください。

「ちょっとハードルが高い」と感じられる場合は、「一大会会員」というお試し制度もできたようですし、あるいは実際に指さなくても、見学に足を運んで公式戦の雰囲気を感じていただだけでも歓迎です。

もっともっと大勢の将棋ファンの方々が、チェスに興味を持ってきて、そしてその面白さを知ってくれたらいいなと、私は願っています。



【補足】

2012年の記事中では、「チェスは将棋よりも単純だからね……」と言われる理由を、もうひとつ書きました。

「チェスって、コンピュータが人間より強んでしょ？」

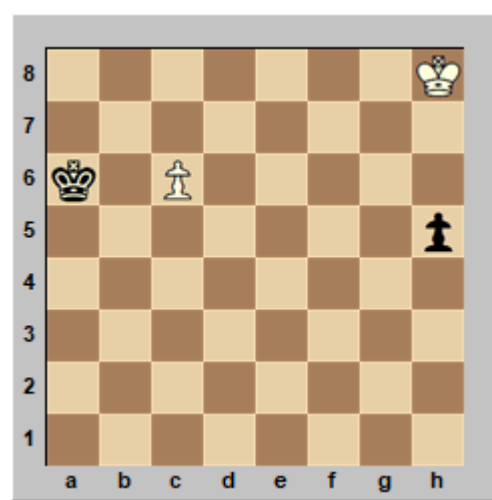
というものです。

1997年に、当時の世界チャンピオンであったカスパロフが、IBMのバックアップで開発された「ディープ・ブルー」に敗れるというニュースがありました。それ以来、チェスが将棋よりも単純であることを裏づけるために引き合いに出されることが多かったです。

しかし、ソフトがプロ棋士を破るようになった現在、上のようなことを言う人はもういないでしょう。

記事を書いたとき、将棋もいずれはコンピュータが人間を破るようになるだろうとは思っていましたが、その速度は私の予想を超えるものでした。

【第5図解答】



(再掲第5図)

1.Kg7! h4 2.Kf6!

自分のポーンと相手のポーンに、「二兎を追う」ような形で近づいていくのが正解です。

2...Kb6

2...h3なら3. Ke6と自分のポーンを守り、同時にプロモーションできるので引き分けになります。

3.Ke5! Kxc6

3...h3なら4. Kd6です。

4.Kf4

あら不思議！ 黒ポーンに追いつくことができました。